

ウルトラマンレオ～異
世界を救え～

daisy

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

異世界に迷い込んだウルトラマンレオ。彼はその世界を守ることが出来るのか？

目次

プロローグ	1
第01話：ゴモラ現る	5
第02話：レオのピンチにアストラ現る	9

プロローグ

「ありがとう。僕にとってその言葉は一生忘れることができません。やっと今、この地球が僕の故郷になったのです。だから、青い空と青い海のある故郷を、この目で見て、この手で確かめてみたいんです」

そう言って指輪・レオリングを指から外すおとり ゲン。

「必ず帰ってきてね」とトオル。

「気をつけてね」と咲子。

「おおとりさーん」

ゲンを追いかけて走り出すトオル。

海まで走ってきたトオル。

「おおとりさーん」

ゲンの乗るヨットに手を振るトオル。

「おおとりさーん」とトオル。

「さようならー」とゲン。

その時、ヨットに乗っているゲンの前に不思議な空間が現れた。

(何だ?)

ゲンはその空間に手を伸ばした。

すると、ゲンはその空間に吸い込まれた。

「うわああああ!」

ドスツと地面に落ちるゲン。

「どこなんだ、ここは?」

ゲンは辺りを見渡した。見た所、日本のようだが……。

空き地にいるゲンは、取り敢えず放浪した。

「うわ!」

風で飛ばされてきた新聞がゲンの顔に当たった。

ゲンは新聞の日付を見た。

平成26年6月13日と書かれている。

「平成26年? 昭和じゃないのか?」

その時、自転車に乗った女の子がゲンに向かって急接近してきた。

「退いて——っ!」

どうやら自転車のブレーキが利かないようだ。

ゲンは懐に潜り込んだ自転車を足で止め、そこから投げ飛ばされた女の子を空中で

キヤッチして着地した。

「あ……ありがとう……」

女の子は頬を赤らめた。

ゲンは女の子を下ろした。

「貴方、見たところ地球人ではなさそうね。でも、悪い人でもないわね。私、鏡^{かがみ}望美^{のぞみ}。」

ミラーマンの娘よ」

「ミラーマン？」

「この地球をインベーダーから守るため、鏡の世界からやってきたの。貴方は？」

「僕はウルトラマンレオ。僕の故郷はあそこさ！」

ゲンは獅子座の方角を指差した。

「獅子座？ あんな所に惑星なんて……」

「マグマ星人に破壊されてしまったんだ」

ゲンは悔しそうな表情で拳を握り込んだ。

「そうなんだ」

「それで、インベーダーって？」

「地球外生命体。デビル星の侵略者よ」

「デビル星……」

「あ、いけない！ 遅刻しちゃう！」

望美は自転車を起こした。

「ちよつと待って。その自転車、ブレーキが利かないんじゃない？」

「そうだったわ。どうしよう？」

「送ってあげる」

ゲンはレオに姿を変えると、望美を手に乗せて目的地へ送り届けた。

「ありがとう」

レオはゲンの姿に戻った。

その様子を遥か上空の宇宙船の中から見ている雪だるまの形をした怪人ジャッコフ
ロスト。

「何とも忌々しい！ 神は異世界からウルトラマンを呼んだか！」

第01話：ゴモラ現る

校門から望美が出て来る。

ゲンは望美に声をかけた。

「鏡さん」

「レオさん」

「おおとりって呼んでくれるかな？」

「おおとりさんね。分かったわ。何してるの？」

「行く当てがないんだ」

「そう。じゃあ家へ来るといいわ」

ゲンと望美は歩き出す。

「僕なんかがいきなり行って大丈夫かな？」

「大丈夫よ。一人暮らしだから」

「そうなんだ」

鏡家に着く。

二人は家の中に入る。

「その部屋で待ってて」

ゲンはリビングに入り、ソファに腰掛けた。

暫くすると、私服に着替えた望美がやってきた。

「おおとりさん、何か食べる？ 行く当てがないってことは何も食べてないんでしょ？」

「僕はウルトラマンだから、光さえあれば食べなくても平気なんだ」

「その、さつきから言ってるウルトラマンって何？」

「ウルトラマンってのはウルトラ戦士のことさ」

「ウルトラ戦士？」

「地球から三百万光年離れたところにあるM78星雲・光の国の宇宙警備隊の隊員のこ

となんだ」

「待って。M78は千六百光年よ？」

「僕のいた世界では三百万光年離れてるんだ」

「そうなんだ。ということは、貴方は異世界人ね？ それも、二次元世界とは違う」

「そういうことになるのかな」

「パラレルワールドかあ。おおとりさんの世界に行ってみたいなあ」

その時、部屋にある電話が鳴った。

望美が受話器を取った。

「もしもし?……はい。……はい、分かりました」

「何だったの?」

「SGMからよ。インベーターが来たらしいわ。貴方にも手伝ってもらいたいんだけど、頼んでいいかしら?」

「構わないよ」

ゲンと望美はSGMに向かった。

望美はSGMの隊長にゲンのことを紹介した。

「そうか。手伝ってくれるのか」

「はい」

「では、早速だが、インベーターを撃退してくれ」

ゲンと望美はインベーターが降り立った場所へと急行した。

「この辺のはずなんだけど……」

その時、地面が激しく揺れ、地中からゴモラザウルスが出現した。

「あの怪獣は!?!」

「恐竜の凶鑑で見たことがるわ。あれはゴモラザウルスね!」

ゴモラが地上のゲンたちに襲い掛かる。

「レオ——ツ!」

ゲンはウルトラマンレオに変身し、ゴモラに反撃する。

レオの飛び蹴りがゴモラに炸裂した。

「やあー！」

レオはゴモラをラッシュ攻撃で追い詰めて行く。

「とどめー！」

レオは飛び上がり、レオキックの態勢に入った。

その刹那、ゴモラの中から何かが飛び出し、空の方へ飛び去った。

そしてレオキックがそのままゴモラに当たって爆裂霧散した。

レオは空を見上げる。

（今、何かが飛んで行ったようだったけど……）

レオはゲンの姿に戻った。

第02話：レオのピンチにアストラ現る

望美の家。

ゲンと望美が食卓でご飯を食べていた。

鏡家の電話が鳴り響く。

「はい」

望美が電話に出た。

「ああ、御手洗博士。……はい。……はい、分かりました」

「何だって？」

「御手洗博士は父の知り合いでね、渡したいものがあるから取りに来てって」

二人はご飯を食べた後、SGMへと向かった。

SGMで御手洗に会う二人。

「御手洗博士、渡したいものって？」

「これじゃよ」

御手洗は望美に封筒を渡した。

封筒には鏡 望美へと書かれていた。

「これは……?」

望美は封筒から紙を取り出した。

紙にはこう書かれている。

望美へ。君には変身能力がある。その力で地球をインベーターから守ってくれ。鏡のあるところでミラー・スパークと叫ぶんだ。訳あって私は君の側にはいられない。この地球を、人類の未来を君に託す。

「変身能力……? やっぱり私にも備わってるのね! 私、やるわ! この地球を守る!」

その時、地響きがゲンたちを襲った。

「何!?!」

ゲンたちは窓から外を見る。

その向こうには、真つ黒な甲冑かっちゅうのような身体と雄牛のような二本の角、背中にはゴマダラカミキリをモチーフにした甲羅こうらを持つ怪獣、ゼットンの姿が。

「ゼットーン……ピポポポポ……」

「ゼ、ゼットンだ!?!」

「ゼットンって?」

「かつて地球へ最初に訪れたウルトラマンを倒したと言う最強の怪獣だよ」

「私が行くわ!」

望美は自分の姿が反射するガラスの前に立って叫んだ。

「ミラー・スパーク!」

望美は光となり、ゼットンの下に移動し、ミラーマンのような姿のミラーウーマンに姿を変えた。

「ミラーナイフ!」

ミラーウーマンがミラーナイフをゼットンに投げるが、バリアで弾かれる。

その様子を遥か上空で見ているジャックフロスト。

「ゼットン、そんな雑魚は蹴散らしてしまえ!」

「ゼットーン……ピポポポポ……」

ゼットンが一兆度の火球を放った。

「うわ!」

火だるまになり吹っ飛ばされるミラーウーマン。

「熱い……!」

そこへウルトラマンレオが現れ、ミラーウーマンを包む火を消した。

「ゼットーン……ピポポポポ……」

ゼットンがレオに波状光線を放つ。

レオがそれを側転でかわすと、その先にゼットンが瞬間移動してパンチを繰り出した。

「うわー！」

レオは不意打ちを食らって怯んだ。

そこへ追い打ちをかけるように波状光線が迫る。

「ぐっ！」

レオはその場に倒れる。

「ゼットン……ピポポポポ……」

レオのカラータイマーが点滅を始める。

「くっ……！」

レオはネットクバックで立ち上がり、空高く飛び上がってレオキックをゼットンにお見舞いしようとするが、瞬間移動でかわされてしまう。

そこへアストラが現れる。

「兄さん、助太刀に来たよ！」

「アストラ！」

「ゼットンの動きは僕が封じる！」

アストラはそう言うのとゼットンの背後に回り込み、その体を羽交い締めにした。

「兄さん、今だ！」

レオが空高く飛び上がり、レオキックをゼットンに叩き込むと、アストラはゼットンが爆裂霧散する寸前に素早く飛び退いた。

「アストラ、どうやってここへ？」

「兄さん、ウルトラの科学に不可能はないんだよ」

「あの……どなた？」

ミラーウーマンが訊ねる。

「紹介するよ。弟のアストラだ」

「アストラです。兄がお世話になってます」

「二次元人のミラーウーマン、鏡 望美です」

活動限界時間が訪れ、レオとミラーウーマンが人間体に戻る。

「それじゃあ」

アストラは飛び立ち、空の彼方へ消えて行った。

その様子を見ていたジャッコフロストは叫んだ。

「おのれウルトラ戦士めー！」